

加藤貞泰公の生誕地調査

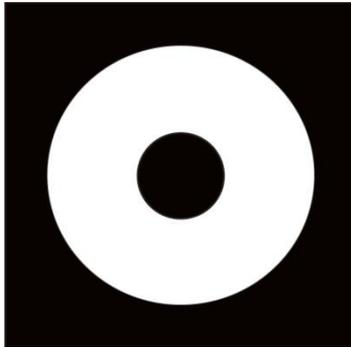
|| 新史料で定説を覆す ||

『生国は濃州岐阜橋詰』



加藤貞泰肖像画 大洲 龍護山曹溪院蔵

黒野城と加藤貞泰公研究会



目次

はじめに	3
一、貞泰公生誕地の史料	4
(一) 近江磯野村説	4
その1	4
その2	4
その3	4
その4	5
(二) 近江高島説	5
二、霊牌名簿から探る居住地	6
三、近江国磯野村を調査	7
四、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査1	9
五、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査2	10
六、貞泰生誕前後の父光泰動向	12
七、磯野にて生誕説は？	13
八、高島にて生誕説は？	13
九、貞泰公の母について	13
十、貞泰公母の住居について考察	14
十一、生誕地考察	14
十二、岐阜今泉村橋詰の地図	15
引用文献	17
編集後記	17

■はじめに

加藤貞泰公は加藤光泰の嫡男として天正八年に生まれる。父光泰が甲斐国二四万石のとき朝鮮で死去した後は、美濃国黒野城主四万石、伯耆国米子城主六万石、伊予国大洲城主六万石へと転封、豊臣・徳川両政権下を生き抜いた大名である。加藤貞泰公の生誕地については、加藤家の家史には近江国磯野村と記されており、今日まで磯野村が生誕地として定説になっておりました。

しかし、平成二六年(2014)、研究会員の座馬秀明氏が高野山の伊予大洲加藤家墓所を訪れたとき、貞泰公の五輪塔に殆ど読めないが「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘を発見されました。

造立者は、貞泰公の嫡男の五郎八・大洲藩主泰興公で、貞泰の家督を相続して父を顕彰するために建てた墓である。

この刻銘発見は、加藤家の系譜上の新発見であり、大変驚いたものでありますが、正確性を確認する為の調査が必要でありました。

このたび、貞泰公の生誕地について、文献調査などを含め、高野山にて五輪塔の刻銘文字調査を行い、これらを報告書としてまとめました。

一、貞泰公生誕地の史料

(一) 近江磯野村説

加藤貞泰の生誕地は、加藤家の家史「北藤録」、「大洲秘録」に記載されています。

「北藤録」は、伊予史談会双書の第六集、大洲藩主加藤氏の家史である。第六代藩主加藤泰衡（やすみち）が家史の編集を念願し、桃井尚齊に命じ、各地の膨大な史料を収集・研究させること十五年にして、宝暦九年（1759）に編集を完了したものである。その出生記述箇所を抜萃してみました。

その1

- 「北藤録」卷之九 貞泰之伝（60頁）
- 一 加藤左近大夫貞泰ハ遠江守光泰ノ嫡男ナリ、幼名作十郎、初ノ諱光長トイフ。従五位下ニ叙シ、左衛門尉ニ任シ、其後改メテ左近大夫将監ニ任セラレ。
 - 一 天正八年庚辰（1580）江州磯野村ニ生ル。母ハ一柳藤兵衛女ナリ、室ハ但馬出石ノ城主小出播磨守吉政女ナリ 法号 法眼院殿亮悟日俊大姉、寛永十三年丙子（1636）六月十四日卒ス。武州本所日蓮宗寂教寺ニ葬ル。

その2

「北藤録」卷之十八（233頁）
加藤世系（坤）
加藤豊後守重光 加賀守吉信男 二十一代之裔孫権兵衛景泰之嫡男。

女子 右近（濃州今泉橋詰人、姓氏・諱不レ伝）室。母姓氏不レ伝
光泰 作内・従五位下、遠江守、初諱景教
母同上。室一柳藤兵衛女、甲斐国主。天文六年丁酉（1537）ニ干濃州橋詰庄。……

女子 加藤信濃守光吉室
女子 竹中丹後守重門室
女子 後に石河備後守光遠室
女子 村上太郎兵庫室
女子 冷泉中納言室
貞泰 作十郎、従五位下左衛門尉、後改任ニ左近大夫将監。
室小出播磨守藤原女、天正八年庚辰（1580）生ニ干江州磯野村。……

その3

他に江州磯野村生まれの記述は、「大洲秘録」の「加藤光泰貞泰軍功記」や、寛政五年（1793）〜文政二年（1819）

に刊行の「群書類従」、「続々群書類従」（史伝部）に採録されている。

「大洲秘録」御家伝 光泰貞泰軍功 貞泰（27頁）
貞泰

光泰の嫡男 初作十郎 後従五位下に叙し 左エ門尉に任じ、其後改めて左近大夫将監に任ぜらる 天正八年庚辰江州磯野村ニ生る 母は一柳藤兵衛女なり ……其説詳かならず 文禄三年甲午 貞泰十五歳 甲州より濃州黒野エ所替え四万石を領す……

その4

また、後世に編纂の「寛政重修諸家譜」巻七百七十四（寛政年間1789～1800）には天正八年近江国磯野村に生る。と記載あり、加藤家の家譜から引用されていると思われる。



磯野の位置図

(二) 近江高島説

伊予史談会双書の第七集「大洲秘録」は、大洲藩士人見栄智がいちおう元文五年（1740）に書き写し、安政六年（1859）に城戸三郎右衛門が謄写したもので、栄智は人見栄将の養子となり、第四代藩主加藤泰統（やすむね）及び次の泰温（やすあつ）に仕えた。

「大洲秘録」の御系図（35頁）には、

加藤左近大夫貞泰公

初作十郎 左エ門尉

濃州黒野城主 又伯州米子城主

天正八辰年江州高島ニテ御誕生 元和三年大洲城

ニ御移……



高島の位置図

二、霊牌名簿から探る居住地

「紀州高野山講坊伝記ノ写」

加藤姓御代々霊牌之名簿 并由略記

「北藤録」(104頁～107頁)

高野山講坊の再興の大檀主であったという加藤家の霊牌記録に、加藤景泰から貞泰に至る家史が見られます。その中から関係分を抜萃。

元亀元庚午歳(1570)十二月十五日

徳苗宗善居士

濃州岐阜橋詰加藤遠江守光泰公御建立、奉_レ為_ニ滋父_一

右は、光泰の父景泰の没年月日と戒名で、光泰が岐阜橋詰に在住の時に建立している。この頃は信長が岐阜に在城し、光泰は岐阜町近くの橋詰に屋敷があったことが読める。

慶長九甲辰歳(1604)五月二日

妙金禪定尼

加藤左衛門尉貞泰公御室

右は、貞泰の室(先妻)の没年月日と戒名である。年号と左衛門尉の名から、貞泰が二四才、黒野城に在城している時に亡くなられている。

元和九年癸亥歳(1623)五月廿二日

英叟雄公大居士

奉_レ為_ニ加藤左近大夫貞泰公_一、孝子五郎八泰興御建立。
於_ニ奥院_一御石塔一基御造立 高一丈余。

五輪塔

金欄打敷并幡一流御寄付。

右は、貞泰公の没年月日と戒名。貞泰の嫡男五郎八はこの時、元服前の十二才。この年、父貞泰の遺領大洲城地六万石を相続した。おそらくこの頃に五郎八は父貞泰公を顕彰するために石塔を造立と思われる。

高さ一丈(約三メートル)の五輪塔一基と寄附品目二点が奉納されている。

この石塔とは高野山の伊予大洲加藤家墓所に立つ五輪塔のことである。

この史料を基に、平成二六年五月、研究会の座馬氏が石塔を確認中に貞泰の生国地名が刻まれていることを発見した。

三、近江国磯野村を調査 平成二五年（2013年10月）

磯野村は、滋賀県長浜の北北西約十二キロメートル、小谷城から北西約六キロメートル、琵琶湖から東約二キロメートルに位置する村で、現在の高月町磯野である。

滋賀県の教育委員会に問合せをしたメール情報を以下に記す。

○ 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 城郭調査担当様

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

淡海の城友の会会報でお世話になって折ります。いつも楽しく見させて頂いております。

私は、美濃国黒野城の研究をしています。お尋ねする窓口が違うかもしれませんが、近江国の磯野村について調べています。

秀吉が長浜に城下を築いた後の天正八年（一五八〇）、家臣に加藤光泰がおり、光泰嫡男の貞泰が近江国磯野村で生まれたと加藤家の記録に書かれています。磯野村にはそのような痕跡が残っているかどうか分からないでしょうか？

加藤光泰は、甲斐国二十四万石国主のとき文禄二年（一五九三）文禄の役で朝鮮で死去し、四ヶ月後の文禄三年、嫡男の貞泰（幼名作十郎）が十四歳の時、黒野四万石に転封し黒野

城を築く。慶長十五年米子城に六万石で転封。元和三年大洲城に転封、初代藩主になり元和九年（一六二三）江戸屋敷で没（四四歳）。大洲藩は明治維新まで大洲藩の加藤氏が十三代続いた。

以上が加藤貞泰の概要です。お手数をかけますが、よろしくお願いいたします。黒野城と加藤貞泰公研究会 副会長

河口耕三

●ご質問につきお答えいたします。

加藤貞泰が近江国磯野村で生まれたことについては江戸幕府が編纂した『寛政重修諸家譜』（大名・旗本に家の由緒について提出させたものを編纂したもの）に載っています。同書によれば、加藤光泰は近江北郡のうちに七百石賜り、としか書かれておらず、領地がどこか、居城はどこかは不明です。滋賀県が、かつて実施した中近世城館分布調査で、磯野村に城館があったことが確認されています。一つは磯野山城という山城で、磯野村の西にそびえる山上にあったといわれています。

伝承では浅井氏の家臣磯野氏（後に信長に寝返った磯野員昌の一族）の居城といわれています。現地に残る遺構も、堀や土塁・堀切を用いた、中世山城の構造を持っており、長浜城時代の秀吉家臣の居城としては、違和感があります。も

う一つは磯野館といい、磯野の集落内にあったようです。こちらについては所在地も含め、情報は何もありません。現況でも城跡の痕跡は皆無のようですし、城主についても分かりません。ただ、加藤氏がもし磯野村に居館を定めたというのであれば、こちらの方が可能性は高いと思います。

しかし、いかんせん城があったことすらよくわかりませんので、確かなことは何もいえません。

とりあえず、こちらで分かる範囲のことをお答えしました。ほとんど答えになっていないかもしれませんが、お許しください。なお、現地の情報等については、地元の長浜市の方が詳しいと思います。長浜城歴史博物館にお問い合わせになってはいかがでしょうか。

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課（城郭調査担当）

松下 浩

● 長浜城歴史博物館の回答

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

高月町磯野の郷土史研究家は、加藤光泰が、磯野村で領地をもらった史料は、以前から認識しておりました。しかし、地元には本件について、まったく伝承がありません。

加藤光泰は、秀吉家臣団では重要な位置を占める人物と思いますので、今後、地元での顕彰活動を展開していくべきと考えています。

なお、地元にある城郭は、戦国大名浅井氏の重臣・磯野員昌の家に関するもので、加藤家とは無縁と見ていいでしょう。長浜城主秀吉の家臣たちは、長浜城内に屋敷はありましたが、それぞれの給所に屋敷を持っていたことは、常識的には考えられません。

以上、要件のみにて失礼します。

長浜城歴史博物館

太田浩司

○ 長浜城歴史博物館 ご担当様

「近江国磯野村に残る加藤氏の痕跡について」

初めてメールを送らせて頂きます。松下浩様（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課）のご紹介でお尋ねします。…以下省略。

四、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査 1

平成二七年(2015) 一月二四日 研究会発表資料

研究会員 座馬秀明氏

平成二六年(2014) 五月四日、和歌山県伊都郡高野町にある真言宗高野山に行き、加藤家墓所の調査をされた。

奥之院にある弘法大師廟所までの参道は約二キロメートル。参道の両側には夥しい数の石塔が立ち並び、その中から加藤家の墓所を探すのは困難であった。幸い山内の案内書にて下掲の地図を見つけた。撮影の許可を得て写真に収め、これを頼りに加藤家墓所に辿り着くことができた。

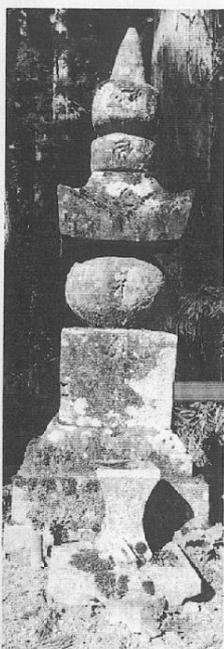
高野山の墓石調査を行った座馬氏は、墓石が390年を経っており、文字全ての視覚判読が困難のため、不明文字は凹文字書体を指でなぞり解読された結果で、「岐阜橋詰」には大変驚いたものである。

しかし、目視や指の検証では不明瞭の為、第三者にて再度調査し、確認する必要性がありました。

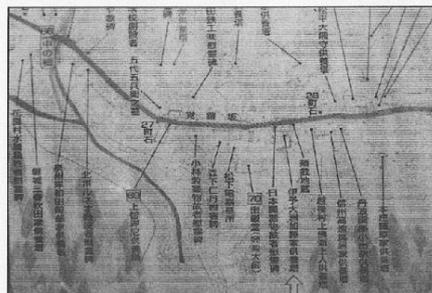
高野山加藤家の墓所

平成 27 年 1 月 24 日 座馬秀明

平成 26 年 5 月 4 日、和歌山県伊都郡高野町にある真言宗高野山に行き、加藤家墓所の調査をした。
奥之院にある弘法大師廟所までの参道は約 2 km。参道の両側には夥しい数の石塔が立ち並び、その中から加藤家の墓所を探すのは困難である。
幸い山内の案内所にて下掲の地図を見つけた。撮影の許可を得て写真に収め、これを頼りに加藤家墓所に辿り着くことができた。



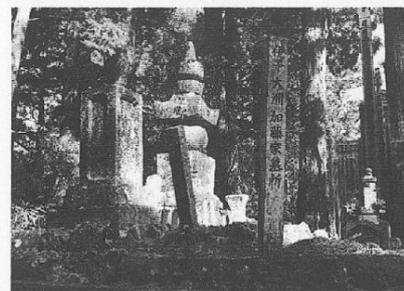
① 3基のうち1基は五輪塔。



伊予大洲加藤家供養塔



② 五輪塔の最下段部分の拡大。風化が激しく判読に苦労した。



伊予大洲加藤家墓所と記された標柱の奥に三基の墓碑があった。

梵字
 生國濃州岐阜橋詰今者
 予幼大州為加藤左近殿
 為英叟雄公大居士
 孝子加藤五郎八造立之
 元和九癸亥五月廿二日

貞泰公は岐阜で生まれた?

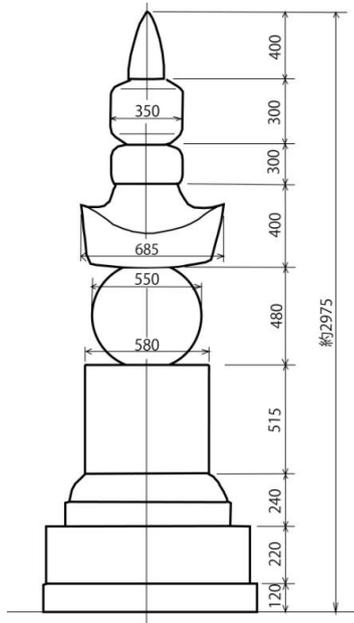
③ 加藤貞泰公の墓であることが判明した。

五、高野山 伊予大洲加藤家墓所調査 2

平成二九年（2017）七月五日、高野山の加藤家墓所に研究会の四名にて岐阜から日帰りの調査に入る。雨が降りだし午後からの調査。高野山の霊木コウヤマキをお供えし、墓石を水洗。拓本で写すも長年の風化などで文字周囲の表面凹凸があり読み取れず、目視と写真撮影で文字を確認。座馬氏調査と一致したが、新たな文字も写真解読で判明した。



伊予大洲 加藤家墓所



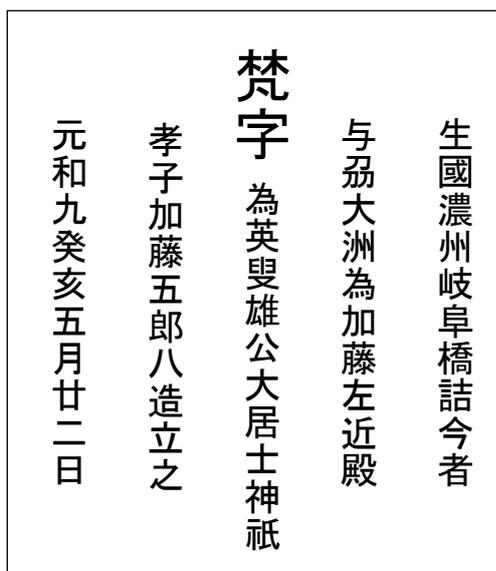
五輪塔スケッチ図

高さ約3メートルで高野山伝
記写しの1丈とほぼ一致



五輪塔 刻銘

(正面にのみ刻銘あり)



五輪塔の原文



生國濃州岐阜橋詰今者

刻銘解釈

生国しやうこく（生まれ故郷）は濃州岐阜橋詰いまは（今泉村内）今者

与予大洲加藤左近殿（大洲城主の加藤左近大夫将監・貞泰）

英叟雄公大居士神祇（英いそうゆうこうだいこじじんぎ）（加藤貞泰公の戒名に続いて神祇）の為に

孝子（親孝行の子供のこと、墓碑名などに子が自分の名の上に付ける語）
加藤五郎八（貞泰公嫡男・泰興公の幼名）が、父を供養する五輪

塔を造立（ぞうりゆう）

元和九年（げんな）癸亥（みずのとい）（1623）五月二十二日（貞泰公没年月日）



加藤家墓所

月光院殿御華瓶（げっこういんでんごけびょう）



五輪塔前の華瓶



標柱

大洲藩主 加藤家御墓所

五輪塔左側の小さい墓は、宝永四年（1707）の大姉と童子の墓。左側は、天和二年（1682）と貞享二年（1685）の刻銘。全三基が並ぶ。



調査者の筆者・郷孝夫氏・河島勝氏・高井勝氏



中の橋から奥の院へ向かう道
中央奥が加藤家墓所

六、貞泰生誕前後の父光泰動向

(「北籐禄」他より抜萃)

光泰年齢

光泰、始め齊藤竜興に仕える。

永祿七年(1564)二七 美濃三人衆が岐阜城開城。

この頃か、信長より三〇〇貫、秀吉に従う。

元龜元年(1570)三三 越前朝倉攻め。金ヶ崎の戦に与力。

十二月十五日光泰父の景泰権兵衛没

戒名法名徳苗宗善居士 濃州岐阜橋詰の光

泰が高野山に建立。

元龜二年(1571)三四 六月二九日光泰母没。

元龜三年(1572)三五 浅井、朝倉の支城横山の砦攻略の功で同国

北郡の内磯野村知行七百貫、与力士十余人。

天正元年(1573)三六 浅井長政の小谷城攻め。桑名出陣。

長浜新城の普請に関わる。

天正二年(1574)三七 秀吉、長浜城入城。

天正三年(1575)三八 光泰、安土城築城に際し街道往還の警備

奉行を務める。

天正四年(1576)三九 織田信長、岐阜城から安土城に居館移す。

天正六年(1578)四一 三木城攻め。秀吉に属す光泰は播州在番。

天正七年(1579)四二 播州三木城攻め、丹波攻め、福知山討入り。

長浜から安土に屋敷(推定)

信長の岐阜城下に屋敷(推定)

大垣 城持ちで周山・高島に屋敷(推定)

母は懐妊で岐阜屋敷 (推定)

天正八年(1580)

四三

貞泰誕生。(陰曆三月)母一柳藤兵衛娘。三木城攻略の功で秀吉から五千石賜る。一書には播州姫路の城在番で一万石。

天正九年(1581)

四四

鳥取城攻めに参加。

天正十年(1582)

四五

備中高松城攻め。本能寺の変で明智光秀と山崎合戦。

丹波国(京都)周山城主一万七千石となり初めて城持ちになる。

天正十一年(1583)

四六

賤ヶ岳合戦、高島郡大溝城主、江州高島へ所替え二万石。

天正十二年(1584)

四七

犬山城在番、小牧山合戦。この年、貞泰弟光尚平内、近江国で誕生。

天正十三年(1585)

四八

大垣城四万石、改易処分秀長に預けられる。

以下省略

尚、参考として加藤光泰の生誕地は二説あり、濃州多芸郡橋爪説と厚見郡今泉村橋詰説がある。同名であるので混乱しているが、加藤家では厚見郡の橋詰を記載。美濃の史料などには多芸郡の橋爪を記している。

十、貞泰公母の居住地について考察

「北藤禄」によると、光泰二六歳の永禄六年（1563）齊藤竜興に仕える頃、又は永禄十年（1567）頃、光泰は信長から三〇〇貫貫い秀吉の家臣になる。織田信長が岐阜城入城の永禄十年前後から光泰は、岐阜町の南に位置する今泉村橋詰に住んでいたと思われる。

天正二年（1574）、安土城天主が完成。天正八年頃は、父光泰は近江など各地を転戦中である。

信長が安土城に入場後、岐阜に居る家臣の家族らが安土城下に移ろうとしないで、信長命で岐阜の屋敷を焼き払い安土にさせたと言う話がある。貞泰誕生二年後の天正十年（1582）に本能寺の変が起きているが、その間の出来事であろうか。その天正八年（1580）に貞泰は出産している。

天正十年、周山城主一万七千石となり光泰初の城持ちまでは、光泰は各地の戦場を転戦しており、妻（貞泰母）は岐阜の光泰屋敷で生活していた、或いは出産で帰省していた。

母の西野の実家は既に無く、西野と橋詰は約八〇〇メートルと直ぐ近くである。

ルと直ぐ近くである。

十一、生誕地考察

◇生国記録を年代順に並べる◇

1580 天正八年 貞泰誕生

1623 元和九年五月二十二日 貞泰没 四四歳

1624頃 元和十年頃 貞泰嫡男五郎八（泰興）

高野山に五輪塔造立

「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘

1740 元文元年 「大洲秘録」高島にて誕生

1759 宝暦九年 「北藤禄」磯野村に生る

貞泰公の生誕地は、史料を時系列から見ると、生誕から最も近い史料は五輪塔の刻銘である。貞泰の嫡男五郎八（泰興）が、貞泰死去後に遺領予州大洲藩の家督を相続。弟の直泰に新谷藩一万石を内分している。元服前の五郎八は高野山に父を想い五輪塔を造立。

「北藤録」の編集完了は宝暦九年（1759）で元和九年（1623）の貞泰没後から一三六年後の編集になる。

前記の「高野山講坊伝記ノ写」には、生国の記載が無い。ため、「大洲秘録」「北藤禄」編纂の時には、江州高島や磯野にて御誕生となり、岐阜橋詰が出生地にされなかったと推察。

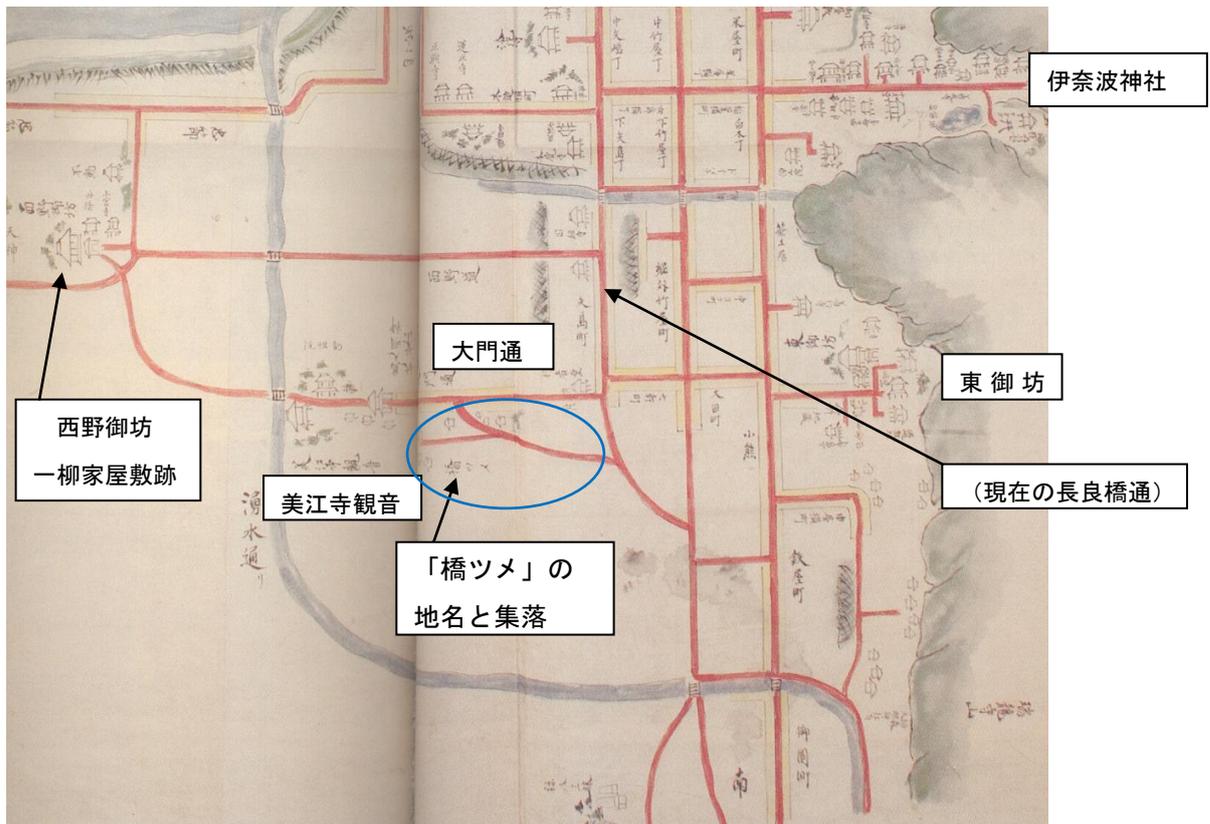
どちらを信頼するかとなれば、五郎八が建立した「生國濃州岐阜橋詰」の刻銘の方が信頼性が高いと考えます。しかも嫡男が建立している第一級の一次史料であります。

以上の調査・研究成果を踏まえて、生誕の地は、「濃州岐阜橋詰」で今泉村の内であると確信します。

十二、岐阜今泉村橋詰の地図

「日本地名大辞典」

今泉村は近世の江戸時代く明治三十年の村名。美濃国厚見郡のうち。はじめ幕府領大久保石見守支配、元和五年より尾張藩領。村高は「慶長郷牒」一〇三〇石余、「正保郷帳」「天保郷帳」「旧公旧領」は共に、一〇四〇石余り（うち田方四石余・畑方一〇三六石余・茶年貢三斗余・野年貢二斗）当村の布屋町・七軒町・太田町は岐阜町より続く町屋である。「濃州徇行記」によれば、寛政頃の戸数二九五うち縮緬織屋二・檜笠を製する家二、人口一〇一四、馬二匹。また村民は農間に岐阜町で日雇稼ぎをした。当村は貞享三年三月の大火で岐阜町とともに壊滅的な打撃を受けている。神社に一柳氏産土神の八梅天神、寺に天台宗大日山観昌院美江寺・曹洞宗実徳山本覺寺・日蓮宗三融山円経寺がある。美江寺は、織田信長が本巢郡十六条村より岐阜の繁栄策として本尊十一面観音を移して建立。



「濃州岐阜絵図」部分 江戸時代後期 岐阜市歴史博物館蔵（陶玄亭コレクション）
企画展図鑑「古地図にみる江戸時代の美濃」（岐阜市歴史博物館発行）より引用



今泉村 「維新时期所領区分図」部分
 「平成 25 年 岐阜市歴史的風致維持向上計画」
 図 I-22 より引用

橋詰はこの辺り（円内）

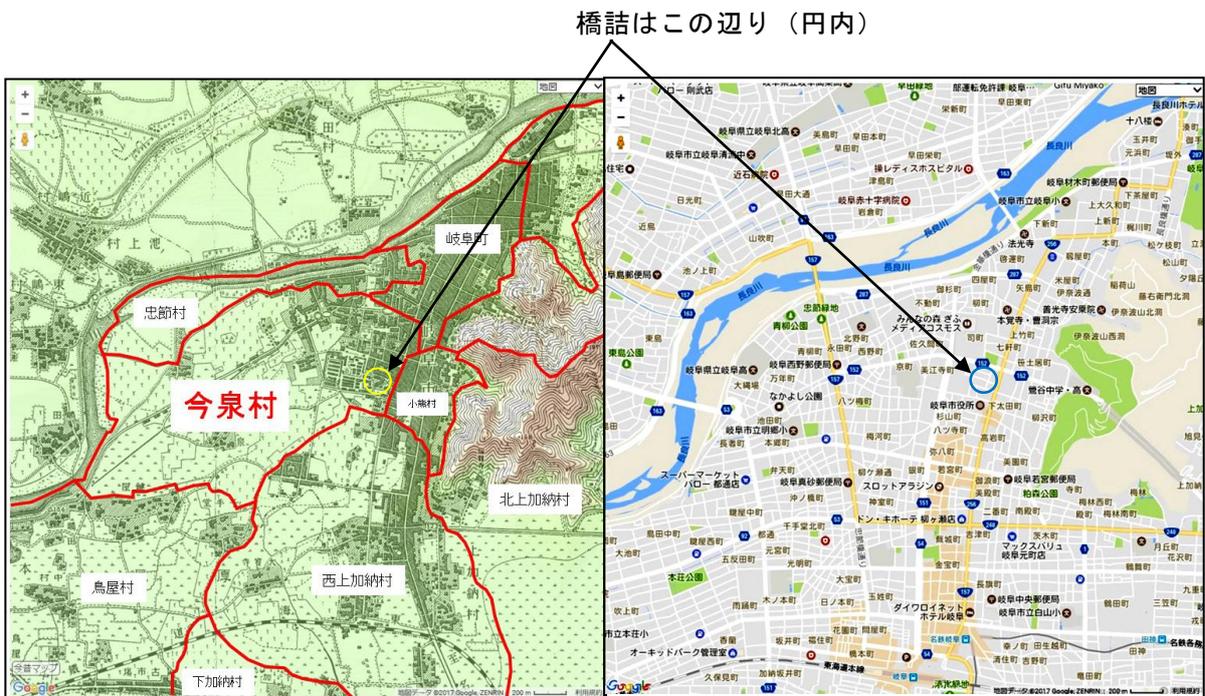
小熊村

端詰町（はしづめちょう）

近代 明治 42 年～現在の岐阜市の町名。
 もとは今泉のうち。字七軒町・字美江寺町・字橋詰町・字鷹見の各一部。昭和 5 年の戸数 93、人口 347、同 40 年世帯数 90、人口 384。

現在の端詰町

1 番地～62 番地のエリア
 （美江寺公園の南、岐阜市役所の北、岐阜地方裁判所の東）



明治 24 年岐阜地図（大日本帝国陸地測量部）

現在の岐阜市地図」@2017 Google

「今昔マップ」より

- ・明治 24 年地図上に明治維新时期の今泉村村境線を記入

作成：研究会 篠田哲郎氏

■引用文献及び御協力者

史料（刊本）

- ・「北籐禄」伊予史談会双書第6集
- ・「大洲秘録」伊予史談会双書第7集
- ・「寛政重修諸家譜」第十三
- ・「角川日本地名大辞典 岐阜県」

書籍・論文・古書等

- ・「大洲藩主加藤家の墓所」大洲市立博物館発行
- ・「加藤光泰貞泰軍功記他（語釈付）」郷孝夫著
- ・「加藤姓御代々壺牌之名簿 並因由略記」「北籐禄」より河口耕三研究会発表資料（2013・7）
- ・「高野山加藤家の墓所」座馬秀明 平成27年研究会発表資料
- ・「謎の武将―柳右近太夫可遊―」児玉和男著 伊予史談会309号 伊予大洲藩―柳系図

絵図・地図

- ・「加藤貞泰肖像画」大洲龍護山曹溪院蔵
- ・「濃州岐阜絵図」岐阜市歴史博物館蔵 企画展図鑑「古地図にみる江戸時代の美濃」（岐阜市歴史博物館発行）
- ・「岐阜市歴史的風致維持向上計画」「図」・22維新时期所領区分図」
- ・「今昔マップ」明治二四年岐阜地図と現在の岐阜市地図（@2017 Google ZENRIN）

写真

- ・高野山 伊予大洲加藤家墓所 御協力者

- ・滋賀県教育委員会事務局文化財保護課 松下浩氏
- ・長浜歴史博物館 太田弘司氏
- ・座馬秀明氏・郷孝夫氏・篠田哲郎氏・高井勝氏・河島勝氏（以上黒野城と加藤貞泰公研究会）

■編集後記

戦国時代、生誕地が不明の武将は多数存在しています。

岐阜で生まれた貞泰は、父光泰没（五六歳）後、光泰の遺言をもとに秀吉の命で大幅な減封となったが、甲斐国から黒野城主四万石で美濃岐阜へ里帰りが出来た。その後、米子城、大洲城へと移り江戸にて没する（四四歳）。

加藤貞泰公の生誕地調査の基は「北籐禄」です。加藤家の詳しい家史があったお陰で深く調査・研究が出来ました。

生まれた故郷は、今まで定説であった近江磯野説は乏しく、濃州岐阜の橋詰であると確信をしました。ひとえに関係各位の皆様御協力があった成果と考えております。

これからは、岐阜で生まれた武将として名乗りを挙げることになります。岐阜市でも黒野でも郷土で誕生した武将として、誇りを持って顕彰活動に取り組んでいきたいと考えております。



加藤貞泰公の生誕地調査

|| 新史料で定説を覆す ||

『生国は濃州岐阜橋詰』

平成二十九年(2017)七月十五日

発行 黒野城と加藤貞泰公研究会

作成 研究会会長 河口耕三

☎ 090・1786・6564

メール kouzo301@yahoo.co.jp

